

することを知らされた。才4日目は午前中測量と写真を行ない、午後から撤収となつた。私は午前中の測量に加わつた。A地点からB地点までの測量であるが、この日も雨が降りしきり昨日の雨水と共に増水して、才二ホール辺りでは天井からゴーゴーと滝のように水が落ちていて、チムニーの所も増水が激しかつた。この為測量は機敏に行なわれた。午後からの撤収も順調に作業が進んで、青海千里洞に別れを告げた。10月4日ベイスキャンプのおかれていた川原を後に出発した頃には、風が落葉を舞い上がらせていた。青海千里洞よさようなら、又来る日まで…………… いつしかそんな感激がわびしさと共に心に迫っていた。

ケイビングにおける確保について

木 本 貴 夫

キスリングをかつぎ出発しようとした時、身震いするようなサイレンの音が谷間に鳴り響く。縁起でもねえ、続いてハツパが2発。黒姫山の一角がナダレのように崩れ落ちる。キスリングと同じ位の石が飛ぶように近く迄落ちた。若しもこれが洞内であれば？　ここは福来ケロの石灰岩採集場である。ここから日本海を背にし、沢伝いに登つて行くのだ。ヒヨロ長い木が密生し手でよけながら歩く。まるでジャングルだ。探検らしい気分になる。沢伝いに歩くこと3時間、無事目的地に着く。青海小穴は、大きなドリーネの隅に丸い口を開けていた。枯葉が吸い込まれるように洞内に散つて行く。洞内からは異様なガスが立ち込めて来る。才三次青海小穴探検における僕の主たる任務はザイルの確保だ。これは予想していた。このような本格派の縦穴には経験がないからだ。この洞穴入口附近は、日が当たらないらしく、一面にコケが生えている。数十メートルもあるデツカイ、ドリーネの壁が日を遮ぎつてゐるのだ。辺りは陰気で冷たく、シーンとしている。暗闇の、未知の、神秘的な地底世界と相応しているかのようだ。唯一つ、今度こそ「地底を征服してやるぞ」の、皆の活気だけはみなぎっている。入口の直ぐ後にある大きな岩にザイルを巻きつけ、片方の端で自分の体を確保する。もう一方のザイルの端を、肩から脇に通し掌で握りしめ、足をピンとのばして確実に足場を踏みしめる。背をのばし、体を後に傾けた。何れもショックに対する態勢だ。これは確保の鉄則である。スリップした場合、どれだけのショックがくるかは数多い練習で体得していた。洞内に降りて行く人の動きは、張りつめたザイルを通して理解できる。ワイヤー梯子を一段一段と降りて行くその動きに合わせて、ザイルを少しづつ手繰りダウンさせるのだ。手繰りする時は、必ず

交互に片方の手が強くザイルを握っていないと行かない。スリッパした場合、ザイルの滑りを止めるのは困難であるからだ。僕はザイル1本に細心の注意を払い、下降している人の動きをとらえる。65メートルもあるA地点からB地点までの距離を、太さ僅か12ミリメートルのザイルで1人の体を確保するのだ。ザイルは岩をこすりつけ、泥にまみれる。ザイルは重い。また、ワイヤー梯子に引つかかつたり、岩に挟まつたりする。ザイルをダウンする場合は、ただザイルがうまく通っているか否かに気を使うだけであり、精神的には疲れるが、肉体的にはたいして応えない。しかし、ザイルをアップする時は、とても1人では無理で2人がかりで確保しなければならない。1人はゼルブストで自己確保し、ザイルを引き上げ、もう1人はスリッパした場合の確保をするのだ。このように確保は、万一のスリッパに備えての安全のために行なうのであるが、もう1つ重要な意義がある。暗闇の世界で、数十メートルにも及ぶ距離を降りたり上がったりしていると、孤独感を覚え不安になる。この精神面に、1本のザイルは大なる影響を及ぼすのだ。つまり自分を支えていてくれるという安心感で地底に挑めるということは、精神面をいらだたせる条件の多い洞内においては大切なことなのである。この1本のザイルは、心と心の命綱である。A地点からB地点まで下りて行くのに、あるいは上がるのには、それぞれ十数分を要し、それを1人ずつ、降ろしたり、上げたりするのは大変な仕事である。3回も同じことを繰り返すとクタクタになる。手袋はザイルとの摩擦で破れ、人指し指と親指のつけ根が痛む。尻は冷え、肩はこり、腰が痛い。僕の洞窟探検におけるイメージを完全にぶっこわしてしまつたのは、この確保と雨だ。僕は洞窟探検は、地上とは関係のないものだとはかり思っていたが、地上でひとたび雨が降ると、洞内の通路は流水でいつばいになり、一瞬のうちに探検するのは不可能となつてしまう。また地上の確保においても、たとえ急に雨が降つても、藪が顔面をたた

きつけようと、ザイルを手放すわけにはゆかない。雨はこのように洞窟探検においては、致命的な影響を及ぼすということが分つた。それから、洞窟における僕の以前の考えは、洞窟イコール秋芳洞・竜河洞であり、それは神秘の地底の世界であり、夢の世界でもあつた。そこには何段も積み重なつた宮殿のような千枚皿、咲き乱れるフロア・ストーン、またシャンデリアもあり、黄金の柱もある。そこは静かな美しい別天地である。しかし、この青海小穴は冷酷だ。地上から地底へ通ずる1本の狭い階段。それは、左右に、前後に揺れ、また裏返しにもなる不安定な階段である。頭上からは、絶え間なしに落石が続く。ものすごいスピードで、耳をかすめて地底へと消えて行く。体は冷たい水で濡れ、泥にまみれる。まさに、死の世界に接する境界線にいるようなものだ。このように落石で侵入者を撃退しようとし、雪溪で洞内を冷たくして困らせ、滝のような流水で地上に追い返そうとする。探検とは未知と融合し、未知を極めることだ。青海小穴探検は、容易ではないだろう。しかし、「困難が大きい程、それに打ち勝つ名誉は大きい」(モリエール)。必ずや、関大探検部のパイオニア精神によつて、この青海小穴が解明されることだろう。